

アチョリの名前（2）

海外で仕事をしていると、現地の名前をもらうことがある。「日本人の名前が呼びにくい」という事情もあるだろうが、それでも現地に受け入れてもらえたような気がして、うれしいものである。前号で詳しく紹介した通り、筆者が業務しているウガンダ北部アチョリ地域で話されているアチョリ語の名前には、それぞれに意味があるということで、自分のアチョリ名をもらうときはとても楽しみであった。

周りの日本の女性陣は、ラケ Laker「姫」、ラキサ Lakisa「優しい」、ラマロ Lamaro「愛」、アベエ Aber「美しい」など、皆いい名前をもらっていた。そのまま日本の名前にも当てはめられそうである。アティム Atim「遠いところで生まれた女の子」という名前も、日本という遠い国から来た女性に名付けるには良い名前だと思う。他方、男性陣への名付けはどうも適当で、発音が似ている理由で、オオノさんはオノノ Onono「何も持っていない男」、ユウキさんはオユギ Oyugi「ゴミ」など、本当にそれは名前なのかと疑ってしまうほどひどい意味の名前を授かっていた。もちろん、本人たちもその名前を嫌がり、後日それぞれ別の良い名前をもらうことができた。ある青年はオヨー Oyoo「道端で生まれた子」と名付けられた。オヨー Oyoo には少し発音は異なるが、もう一つ「ネズミ」という意味があるらしく、いつもあわただしく走っている彼を見て、農家さんがその名前をくれたらしい。「せっかちな自分にはピッタリです」と、彼は存外それを気に入ったらしく、オヨー Oyoo の名前を受け入れた。

さて、かく言う筆者のアチョリ名はムワカ Mwaka という。「年」という意味で、年末年始に生まれた子に付ける名前らしい。しかし、どちら

かというともう一つの「遅産の子」という意味で付けられることが多いようで、現地で「私のアチョリ名はムワカ Mwaka です」と名乗ると、「お前はその名前の意味を分かっているか？」「ずいぶんとママが好きだったんだな！」と、まずは笑われる。しかし年末年始の生まれでも、遅産でもない筆者がこの名前を使っているのには、ちゃんと理由がある。

アチョリで仕事をして1年が経った頃、筆者がひとりで圃場を見回っているとき、農家グループのメンバーの一人に出会って案内をしてくれた。その方は妊婦さんで、その後、生まれた自分の子供に「サワダ」と私の名前を付けてくれたのである。自分の名前を付けてくれたと言うことが、なんだか自分を認めてもらえたような気がして、嬉しかった。その子の名前がムワカ・サワダ Mwaka Sawada であった。そして、その子のアチョリ名を、今度は筆者がもらうことにしたのである。この話をするとなんか笑うことなく、親しみを込めて筆者のことをムワカ Mwaka と呼んでくれる。

今では「サワダ」の名を持つ子供がアチョリ地域に4人になった。そのままムワカ・サワダ Mwaka Sawada と名付けられた子供もいる。ときおり筆者が日本から子供の古着を持っていくとずいぶんと喜んでもらえる。自分の息子が来ていた服を、同じ名前を持つアチョリの子が来ている姿はなかなかうれしい光景である。



筆者が日本から持参した
甚平を着るサワダ君

(2022年7月 澤田)

新・21世紀への道 <その2>

ユニバーサル農業～地域のリソースをつなぐ農福連携

「ユニバーサル」には「普遍的な」とか「万人向けの」とか「誰でもできる」などの意味がある。障害を持つ人たちや高齢者を始めとして、さまざまな人たちが「担い手」となって、地域の人たちが地域の中で農業や福祉を支え合っていく、そんな明るくて夢のある、住みやすい「地元作り」をめざして活動を行っている。

社会参加や雇用機会（現金収入）の拡大を求める障害者や高齢者が存在する一方で、農業分野では農家の高齢化や担い手不足、耕作放棄地の増加等が問題となっている。このような両者を「農福連携」という形でマッチングさせて結びつけることによって、地域の中でお互いに支え合うより良いコミュニティを作ることが課題の解決につながると考えられる。

地元・静岡県袋井市で地域密着型の活動を模索していたところ、袋井市協働まちづくりセンター「ふらっと」の紹介で、新たに農福連携を始めようとしていた障害者福祉施設と出会ったのがきっかけで、2018年頃からこの活動を始めた。

ユニバーサル農業の実践の舞台として障害者施設近くの農家の畑や温室を借りて、ブドウ、藍、シイタケ、センリョウ等の栽培をしている。ブドウやセンリョウを販売して収益を得たり、原木シイタケの栽培をしている。また、栽培した藍を使った藍染め体験会や、6次産業化をめざして藍染め製品作りとその販売も計画している。

これまでのところ、ブドウ、藍、シイタケ、センリョウを4本柱とする栽培体系が確立されている。これらの作目は、栽培管理の手間や季節性も考慮に入れて、バランスの取れた4品目といえる。ブドウやセンリョウの販売によって、少額ではあるが現金収入を得ることができた。またそれに伴って、作業に参加してくれる障害者に工賃を支払うことができ、農福連携の一つの目標に一步步近づくことができた。

ユニバーサル農場での農作業の支援のために、ボランティア的な「サポート隊」が結成されて、各種農作業が協力して行われている。空きハウスを活用したブドウやシイタケの栽培、農業後継者のいないセンリョウ畑の活用は、耕作放棄地や担い手不足への対応策の可能性を示しているといえる。

これまでの活動を通して、地域でユニバーサル農業を実施する基盤がある程度確立されてきた。これからは、既存のユニバーサル農場だけでなく、周辺の一般農家や耕作放棄農地等へも活動を広げたり、地域で活動に興味を持つ人たちともつながり、地域におけるユニバーサル農業を拡大していきたい。さらに、「農」と「福」のマッチングを行うための中間組織を設立し、地域におけるユニバーサル農業の発展を支えていきたい。

ユニバーサル農業の実践を通して、地域の中でより具体的で実現可能なしくみ作りをすることで、「農業良し」「福祉良し」「地域良し」の三方良しのつながりができれば、と考えている。時代は「グローバル」から「リジョナル」へ。これからの時代は、地域に根ざした、地域密着型の活動がますます重要になってくる、私たちはそう考えている。



藍染め体験会の様子



ユニバーサル農場のブドウ



シイタケ菌打ち作業



センリョウの収穫

スーダンの有用植物＜その 3＞

アオイ科の仲間たち

アオイ科（Malvaceae）には数多くの有用植物群があり、世界的にもかなり広く分布している。アフリカ大陸やインド亜大陸は、アオイ科の故郷と目されているようで、野生種の種類が豊富である。スーダンではワタ・ハイビスカス・オクラが代表格であり、栽培植物のなかで重要な位置を占めている。アオイ科はエジプト・スーダンでの栽培の歴史は古く、文化・利用面のユニークな特徴がみられことから、順次ふれてみたい。

まず第一に、ワタであるが、ゲノムとしては 2 倍種のアジア綿と 4 倍種のペルー（海島）綿の 2 種類が存在している。世界的にみると新大陸起源の長毛種のペルー綿が高級品種として、インダス川流域起源とされる短毛のアジア綿に徐々に置き換わっていく過程があったと考えられる。スーダンで古くから栽培されてきた種もインドから入ったアジア綿であったと目されるが、産業革命により綿花産業が発達、大量生産体制が確立し、イギリスの間接統治時代を通して、スーダン綿の産地形成がなされた。特に 18 世紀のアメリカの南北戦争により綿花不足が深刻化したのをうけ、リバーナイル、ジャジーラ、ニューハルファなどが国内における主要産地として開拓がすすんだ。近代工業としての導入・促進から約 100 年ほどが経過し、現在、スーダンには 20 ほどのワタぐり工場（Ginning Factory）が稼働しており、将来的にも有望な輸出用商品作物として注目される。

次にとりあげるのは、飲用ハイビスカスである。これもアフリカ原産のアオイ科とされるが、いつからスーダンで飲まれ始めたものか筆者はつまびらかにはしていない。スーダンでは、カルカデと呼ばれ、乾物屋で秤売りされているのを見かける。夏の清涼飲料として、冷やしたものが供される一方、コーヒー・紅茶の代用品として温めて飲まれることも好まれる。カルカデには、薬用効果があると信じられており、冷たいものは血圧をさげ、逆に温かいものは血圧をあげると言われ

る。スーダンの伝統的清涼飲料として、バオバブの乾物が定番であるが、飲用頻度としては圧倒的にカルカデのほうが高い。日本人には、カルカデの爽やかな酸味が好ましいが、スーダン人は砂糖をふんだんに入れるため、甘い飲み物となる。

3 番目のアオイ科の有用植物はオクラである。この植物の原産地については不明であり、アフリカではないとするのが通説であるものの、スーダンには野生オクラが多く自生しているのも事実である。そのため採種用として栽培する場合、野生種との不用意な交雑をさける目的で十分に隔離して作付けされることが推奨されているが、通常栽培では、自然交雑が発生してしまうようだ。このような条件下での栽培では、品種の固定・維持はむずかしく、好むと好まざるにかかわらず、硬質な野生種との混交がすすむとみられる。他方、利用面ではスーダンのオクラは生食されることが少なく、輪切りで天日乾燥され、さらには粉末化されて、とろみづけ食品となる。輪切り・粉末の加工食品は、ウェーカと呼称されており、生オクラを指示するバーミヤとは名称で区別されている。では、なぜそのような利用形態が発達したのか。おそらくスーダンにおいて生食でなく粉末加工が好まれるのは、野生種との交雑での硬質化・難食化が前提となり、より食べやすい方法が考案されたのではないかと推察される。究極の方法ともいえる粉末利用は、オクラの「半栽培」とでもいうような特殊栽培形態から誕生したのではないかと推察される。



スーダン国のオクラの収穫風景

これらアオイ科作物の相互の関係性については、ふだんは意識にのぼることは少ないが、今回は、スーダンでごく日常的にみられるアオイ科有用植物の 3 つをまとめて紹介してみた。

帯広畜産大学の講義

国際耕種では、これまでたびたび国内の大学・役場等で講義する機会をいただき、乾燥地を中心とした、海外における技術協力の知識・経験、国際協力における開発コンサルタントとしてのキャリア形成のしかた等を学生・一般市民らに伝える活動を行ってきた。近年では、帯広畜産大や日本獣医生命科学大での毎年定例の講義をしている。特に、帯広畜産大での招聘講義については2013年度に初めて講義したときから、毎年継続して実施しており、今年で10年目の節目をむかえた。

帯広畜産大の講義は、同大学とJICA帯広センターとが共同主催する、「国際農畜産論（2019年までは国際畜産論）」である。畜産科学専攻と獣医学専攻の学部2年生が対象で、講師のリレー方式による前期or後期の全12回講義で各国の農畜産事情が紹介される。国際耕種は、その1回分のコマを毎年担当し、モンゴル・パレスチナ・スーダンでの技術協力の過去事例のなかから家畜飼料資源に関係する現場活動を紹介している。さらに、民間の開発コンサルタントとしてODA（JICA）事業にかかわり、途上国での技術協力を展開・実施する立場やその意義・やりがい等を学生に率直に話すようにしている。

講義内容に簡単にふれると、まずパレスチナ事例では、イスラエルによる占領政策下でのさまざまな制約により、農家の劣悪で不利な営農状況を鑑みながら、いかに地域資源の利用に活路を見出していくか。農業残さ・家畜糞尿の利用を促進するため、当時の畜産分野で取り組んだサイレージ製造や堆肥化など「資源循環型」の適正技術開発の過程について紹介している。つぎにモンゴル事例では、冬営地・夏営地での水源確保・整備の重要性にふれつつ、「未利用・低利用」の草原管理や牧民の遊動を促していく工夫について紹介している。最後にスーダン事例では、アトバラ川東岸地区における貧困層牧民らを対象にした、飼料用ソルガム生産のための「集水技術（Water

Harvesting、以下 WH）」の技術選定と実際の導入経緯、またプロジェクト側による一方的なサービス提供の陥穽を避け、一定の費用負担を受益者に求めていく際の考え方を紹介している。

この講義では、上記の3つのテーマに沿って、学生に講義後のレポートを課している。これらのテーマから講義をなぞってもいいし、自分なりに調べたり、勉強したりしたことでもいいし、実際に十勝地域で取り組んでいることでもよいので、選択したテーマについてA4半ページ～1ページ程度にまとめたレポートを提出してもらっている。そのテーマ選択の結果を分類・集計したものが下記に示す表であるが、学生の問題意識の所在や関心の方向性が読みとれる。乾燥のWH技術に一定の学生が興味を示すのもわれわれにとってはおもしろい点である。

年度別の各テーマの選択状況

年度	資源循環型	未利用・低利用	WH	小計/合計
2022	36 (65.5)	19 (34.5)	-	55 (100)
2021	23 (59.0)	16 (41.0)	-	39 (100)
2020	45 (61.6)	28 (38.4)	-	73 (100)
2019	56 (59.6)	14 (14.9)	24 (25.5)	94 (100)
2018	21 (46.7)	13 (28.9)	11 (24.4)	45 (100)
2017	23 (45.1)	15 (29.4)	24 (25.5)	51 (100)
2016	23 (54.8)	8 (19.0)	11 (24.4)	42 (100)
2015	28 (47.5)	14 (23.7)	13 (25.5)	59 (100)
2014	33 (50.0)	14 (21.2)	11 (26.2)	66 (100)
2013	42 (49.4)	20 (23.5)	17 (28.8)	85 (100)
小計/合計	330 (54.2)	161 (26.4)	19 (28.8)	609 (100)

講師と初対面となる教室内での質疑応答では、なかなかはずかしがって正面切って発言してこない学生も、レポート内では、国際協力への興味、専門・研究室の選択について、わりとしっかりした考えの記述があったりして頼もしく感じる。また、過去には、受講生のなかからインターンとして国際耕種にきてくれた学生も複数いる。将来の開発コンサルタント・NGO等として、日本や世界の農業支援の現場を担う人材が受講生からでてくることを期待しつつ、毎年、北の大地での講義交流を楽しみにしている。